No.（１４）令和３年度　地域と共働した博物館創造活動支援事業成果報告書

<table>
<tr><td>事業名称</td><td colspan="4">ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト</td></tr>
<tr><td>実行委員会</td><td colspan="4">たまろくﾐｭｰｼﾞｱﾑ多文化共生推進実行委員会</td></tr>
<tr><td rowspan="4">中 核 館</td><td colspan="4">多摩六都科学館</td></tr>
<tr><td>住所</td><td colspan="3">〒188-0014　東京都西東京市芝久保町 5-10-64</td></tr>
<tr><td>TEL</td><td>042-469-6100</td><td>FAX</td><td>042-469-4152</td></tr>
<tr><td>ホームページ</td><td colspan="3">https://www.tamarokuto.or.jp/</td></tr>
<tr><td>構成団体</td><td colspan="4">NPO 法人西東京市多文化共生センター、武蔵野大学、多摩六都科学館組合</td></tr>
<tr><td>事業開始時点の課題分析</td><td colspan="4">東京オリンピックを契機に都内に限らず国内中の様々な施設で多言語化が進み、博物館においても WEB やパンフレット、ICT による多言語化や、外国語ボランティアの育成・導入等、様々なニーズに応える取り組みが行われつつある。一方、外国人居住者に対する様々な支援は、各行政の多文化共生プランの文脈において各種手続きや防災面など喫緊を用する分野での取り組みがはじまっているが、2019 年度の調査結果からみても博物館による取組は非常に少ない状況にあるといえる。
科学館の所在する多摩北部地域では、外国人居住者人口はコロナ禍においても減少幅は少なく、再び増加に転じることが予想される。博物館は、多文化共生に関わる行政、市民団体等、地域で活動する市民団体や大学と協働した実践を展開することで、在住外国人等に対し博物館体験や学びの機会、社会参加、人生を豊かにする機会の提供が求められる。</td></tr>
<tr><td>事業目的</td><td colspan="4">国内および多摩北部地域の現況をふまえ、本事業を通じ、博物館を中心とした多文化共生社会の推進体制の整備となるべく、以下の３つを事業の目的とする。

１．我が国の博物館における外国人居住者に対する役割の明確化
（国内の博物館と多文化共生の基本的な考え方　等）
２．多摩北部における関係組織等との連携・協働
（地方自治体、設置者、NPO、大学、有識者等との連携・協働　等）
３．博物館における多文化共生推進モデルの構築
（在住外国人向けの広報のあり方、プログラムの開発・実践・検証　等）</td></tr>
<tr><td>事業概要</td><td colspan="4">平成 31 年度より展開している事業の 3 年目として、以下の事業を実施する。

１．実行委員会
本プロジェクトの内容を検討、決定する会議
２．多文化共生の専門家および博物館等における多文化共生の取り組み実態調査
(1)東京都内の自治体、文化施設の多文化共生の取り組み実態調査
(2)海外の博物館その他の多文化共生の先進事例調査　※検討会議のみ開催
(3)在住外国人による多摩六都科学館モニター調査
(4)圏域 5 市の在住外国人の実態調査及び分析
３．科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備
(1)多言語ガイドブック（日中・日韓版）の制作
(2)学校団体利用向けワークシート・見どころマップの多言語化
４．地域在住外国人向けの特別プログラムの企画開発・実践・評価
(1)プログラム A：やさしい日本語によるプラネタリウム解説
(2)プログラム B：やさしい日本語で解説する野外観察会
(3)プログラム C:やさしい日本語による理科学習支援実験プログラム</td></tr>
</table>

実施項目 ・ 実施体系	（1）　地域文化の発信の核となる博物館 ■ア　博物館の情報発信，相互連携 ■ウ　地域のグローバル化拠点としての博物館 （2）　あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動 ■ウ　社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施 （3）　新たな機能を創造する博物館 ■ア　観光･まちづくり･国際交流･福祉･教育･産業等他分野との連携・融合による活動
実施後の 成果・効果等	博物館を中心とした多文化共生社会の実現に向けて、計画時に設定した４つの目標に対する成果・効果について記す。 **１．科学館情報の多言語化の推進** 日本語を母語としない利用者向けに、当館のガイドブック日中版・日韓版各 2,500 部を作成し、多摩北部の行政、多文化共生推進団体、都内の国際交流協会等を通じて配布した他、常設展示情報、ワークシートの多言語化を通じて情報提供の充実化を図った。今年度作成したものを次年度以降、活用し、さらなる改善を行う。 **２．在住外国人のニーズの把握** ・やさしい日本語を用いたプログラムのバリエーションや回数を増加させたことで、在住外国人のリピーターが生まれ、募集定員を超える応募回も出てきた。3 年間の事業を継続したこと、また広報協力先も定着してきたこともあり、様々な効果が出ている。 ・今年度実施するモニター調査および、プログラム参加者へのアンケートを通じ、大人・子ども・関係者を合わせて、約 200 のサンプルを集めることが出来た（ただし、プログラムや年齢により、異なる質問を行っている他、日本人も含まれる）。やさしい日本語のイベントの必要性については「やさしい日本語でプラネタリウムを楽しもう」の参加者 59 名の回答者のうち、約 73%が必要と回答し、できればあったほうが良いの約 17%と合わせると約 90%が必要と回答している。これまでの博物館施設は、このような活動を実践してこなかった。しかし、地域で多文化共生を推進する上で、当館のような博物館施設がハブとなり、活動を継続して行うことが在住外国人と市民にとって双方の気づきと学びがもたらさせる可能性が見えてきた。今後も関係者のヒアリング等を継続して実施していく。 **３．多文化共生関係者とのネットワークの確立** 本プロジェクトのヒアリング調査、プログラムを通じて、地域の多文化共生関係の市民活動者、行政、大学研究者等の連携を促進することが出来た。 **４．多文化共生社会の推進に博物館ができることを多くの人に伝える** ・3 年をかけて、館内のスタッフにとって、やさしい日本語を使用すること、在住外国人の来館対応がより自然に行う意識が高まった。専門的な情報開設には言語の壁を越える必要もあるが、そのためのコミュニケーションをあきらめず、取り組む姿勢が身についた。 ・地域在住外国人向け特別プログラムの実施に際し、地域在住の市民活動者、大学関係者、多文化共生の専門家が関わって実践したことから、プログラムの精度を高めることができ、かつ多文化共生の考えが関わった人たちそれぞれに波及しつつある。 ・3 年間の活動を受け、九州産業大学を中心とした九州地方の学芸員向けのやさしい日本語研修講師を 2 年間実施（次年度も決定）、東京都やさ日フォーラムでの事例紹介、放送大学「博物館教育論 22’」での事例紹介、東京女子大学の実習として、やさしい日本語研修、福島県国際協会での事例紹介等、学協会発表以外でも、依頼を受けて当館の多文化共生の取組を紹介する機会を数多くいただいた。その結果、福岡市美術館では、今後の活動でやさしい日本語を取り入れた実践を行う計画を立てていると聞いている。今後もできる限り他館の活動支援も行っていきたい。

【事業実績】

●地域在住外国人向けの特別プログラムの企画開発・実践・評価

(1)プログラム A:やさしい日本語によるプラネタリウム解説

当館のプラネタリウムドームサイエンスエッグを会場に実施し、天文グループのスタッフがやさしい日本語を用いて星空解説等を実施した。

【実施日/参加者】

・第 1 回:2021 年 9 月 26 日(日)17:30～18:30

参加者は小学生以上 66 人(ほかに関係者等 7 人)が参加した。繋がりのある国は、日本のほかに中国、韓国、スリランカ、ベトナムなど

・第2回:2021 年 12 月 5 日(日)17:30～18:30

参加者は、小学生以上 38 人(ほかに視察 10 人、関係者 2 人、スタッフ 3 人)が参加した。繋がりのある国は、日本のほかに中国、アメリカ、スウェーデン、フィリピンなど

<写真1>月の説明スライド

【実施内容】

① やさしい日本語の紹介

冒頭に、解説員がこのプログラム内で「やさしい日本語」を使う意義について説明を行った。

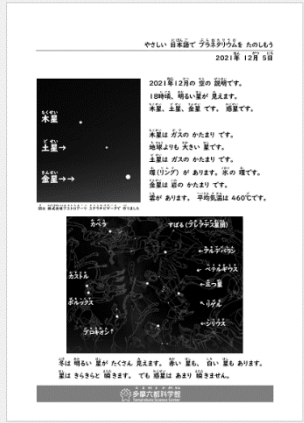
② プラネタリウムの解説で用いる「やさしい日本語」の事前説明

ドーム投影の情報は、誰にでもわかりやすく言い換えた例で、漢字にはルビが振った<写真1>。

またできるだけ簡潔な表現で、ゆっくり、はっきり、重要な言葉は繰り返して伝えた。

③ 冬の星空案内

星空解説だけでなく、終盤には、参加者に事前に調べてもらった様々な言語の「星」を意味する言葉を、満天の星空に重ねて投影する演出を行った。また、スタッフの発案で 2 回目には「冬の星空案内」のプリントをやさしい日本語で作成し、投影後に配布を行った<写真2>。



<写真2>冬の星空案内

④ 宇宙旅行

銀河への宇宙旅行がテーマの映像を鑑賞。

【参加者の感想】

・やさしい日本語で聞いたから、本当に助かりました。わかりやすかったです。(参加者・大人)

・外国語を話す人だけでなく、小学校低学年にも必要。(参加者・大人)

・専門用語がほとんどなくても宇宙のことが伝えられることに素直な感動を覚えた。同様の取り組みが自館でも可能なのではないかと希望を持つことができた。(関係者)

・プラネタリウムをスタートする前に、やさしい日本語のプログラムを実施するにあたっての思いを話されたのが良 かったです。練習問題も工夫されているなと感じました。そして、プログラムの中身が壮大で良かったです。少々の違いを気にしている場合でないという気持ちになりました。科学館や博物館に足を運ぶ良いきっかけになると思います。(関係者)

(2)プログラム B:やさしい日本語で解説する野外観察会

通常事業として東久留米ほとけドジョウを守る会の豊福氏とともに川の生物観察会を行ってきたが、新たに「やさしい日本語」で解説するプログラムを黒目川(東久留米市)で実施した。圏域にある武蔵野美術大学芸術文化学科の協力のもと作製した観察ガイドブックのやさしい日本語版と英語版を配布活用し、記録映像を作成した。

・第 1 回:2021 年 8 月 19 日(木)13:00～15:00

参加者は小学 1 年生～小学 5 年生とその保護者 10 組 20 人、繋がりのある国:日本のほかに中国、アメリカ、フランス、ドイツなど

・第2回:021 年 10 月 10 日(日)13:00～15:00

参加者は小学 1 年生～小学 4 年生とその保護者 10 組 20 人、繋がりのある国:日本のほかに中国、韓国、アメリカ、タイなど

【実施内容】

① 川での活動

3～4 組を 1 グループとし、子どもたちがしぜんと仲よくなることをねらって外国にルーツをもつ子どもたちがすべてのグループに入る編成で活動を行った。保護者やスタッフのサポートのもと、魚と触れ合う、川に入るといった体験がはじめてという子どもが多かった<写真3>

<写真3>川での活動

② 魚の観察

「観察ガイドブック 東久留米の川の魚と仲良くなろう」を活用しながら、捕まえた魚を観察用の水槽に移して観察を行った<写真4>

【参加者の感想】
・黒目川に魚がたくさんいることを、はじめて知ってびっくりしました。(参加者・子ども)
・いろんな生きものに触れ合えて楽しかった。(参加者・子ども)
・かなり本格的に入った魚とりで、やり方も安全管理もたくさんの人にサポートされ、とても充実した体験でした。(参加者・大人)
・先生がいなかったらできなかったです。(参加者・大人)
・Very good: Please keep doing this activity.（参加者・大人）

武蔵野美術大学 芸術文化学科制作によるイベント動画の URL https://youtu.be/rk-k-Pgq1IE

<写真4>観察ｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸ

(3)プログラム C:やさしい日本語による理科学習支援実験プログラム

やさしい日本語を用いた新たなプログラムとして、学習単元につながる実験教室を開催した。テーマは小学6年理科の単元「水溶液の性質」とし、「身近なものの特徴を知ること」を目的に当館の科学学習室で実施した。

開催日時:2021 年 11 月 28 日(日)①11:00～12:30 ②14:00～15:30

参加者は、YSC グローバル・スクールの生徒、外国に繋がりのある小学５年生以上 ①12 人 ②11 人、繋がりのある国:日本のほかに中国、韓国、ネパール、ベトナム、エジプト、アメリカなど

【実施内容】

① 同じように見える水溶液の違いを知り、調べる

見た目は透明な水溶液に BTB 溶液を加えると色が変化し、この色の違いによって酸性・中性・アルカリ性という水溶液の性質を判別できることを実験で確かめた。10 個のサンプル(食塩水・砂糖水・石鹸水・レモン汁など)に、1 つひとつに BTB 溶液を加えていった<写真5>

② 参加者が自宅から持ってきた水溶液で実験

ジュースや調味料、洗剤でも実験を行った。コーラなどのように色が濃くて BTB 溶液で調べることが難しい場合は、pH 試験紙を用いて性質の判定を行った<写真 6>

③ 各自の実験結果で得られた水溶液の性質を、付箋に書いてホワイトボードに貼って全員で確認した<写真 7>

<写真 5>BTB 溶液実験

<写真6>結果から分析

<写真7>結果をみんなで共有

【参加者の感想】
・今日の実験のことについて 1 回読んだことがあります。でもこの実験をしたことがないのでおもしろかったです。
・もう知っていることもあったけど、実験をしたことでより一層分かるようになりました。説明もわかりやすかったです。
・実験をするのが楽しい！
・性質のことがわかった。とてもたのしいです。
・It was good to learn new science information.

●多文化共生の専門家および博物館等における多文化共生の取り組み実態調査

都内の多文化共生先進事例として、港区国際交流協会、世田谷区教育委員会、在住外国人による多摩六都科学館モニター調査を 8 月と 12 月の 2 回、圏域 5 市(小平市、西東京市、清瀬市、東久留米市、東村山市)の行政および市民団体を対象に、在住外国人の実態調査 5 件を実施した。

●科学館の多文化共生および多言語化のサービス向上のための環境整備

・多言語ガイドブック(日中・日韓版)をそれぞれ 2,500 部 制作発行
・学校団体利用向けワークシートの企画制作(低学年向け「自転車」・高学年向け「月」):日本語・やさしい日本語・英語・中国語・韓国語※
・見どころマップの多言語化(やさしい日本語・英語・中国語・韓国語)※

※ワークシートと見どころマップは WEB ダウンロードによる配布とする